

# 植物画と園芸

会期 二〇二一年十一月一日から十一月十四日まで

於 千葉大学園芸学部内  
附属図書館松戸分館2階

—千葉大学附属図書館松戸分館のコレクションから—



千葉大学附属図書館松戸分館では、岩佐亮二名誉教授コレクションをはじめとした古図書を所蔵している。その他にも園芸専門学校時代28年にわたって図画を指導された田中寅三画伯と学生が描いた植物画がたくさん残されている。今回、普段貴重書庫に秘蔵されているこれらの資料と開架資料を合わせて、近世から近代に至るわが国園芸の変遷と本校における教育を、植物画を軸として一覧できる展示を企画した。

## 第一章 わが国における植物画の伝統 —デザインと写生—

江戸幕府に抱えられた狩野派、町衆の間に起った琳派、それぞれに特色のある意匠様式を持った江戸時代の流派であり、植物はよく描かれてきたが、弟子は師匠の絵をひたすら模写していた。しかし、リーダーである狩野探幽や酒井抱一はまた、立場を離れた虚飾のない精密な植物写生画を多数残している。浮世絵の葛飾北斎や歌川広重も同じで、これら江戸の大画家達の植物美を感じることができる。

### 草木花写生

〈狩野探幽(1602-1674)・原版東京国立博物館所蔵／中村溪男・北村四郎著／1977年刊行〉

粉本と呼ばれる手本を模写することが描画の基本だった狩野派。しかし江戸狩野派を確立した狩野探幽はたくさんの写生画を残した。それらをまとめたもの。



ユウガギク(上)など

### 月夜桃と燕

歌川広重(1797-1858)

東海道五十三次絵をはじめとする風景を描いた浮世絵で有名な広重は、花鳥画もたくさん残した。とくに写実を基礎にした鳥のダイナミックな表現には特徴がある。これは王維の漢詩をモチーフにした短冊版画。



トマト(上)とザクロ(下)  
トマトは観賞用にその頃渡来していたもの



ツバキ園芸品種



### 白百合

葛飾北斎(1760-1849)

浮世絵では、一般に写実の要素は少ないと言われる。一方、富嶽三十六景など斬新な構図で知られる北斎は10代の頃から写生を書き溜めており、花鳥版画も残している。これはササユリを描いたものと思われる。



## 第二章 海外における植物画や本草学

わが国における江戸期の植物学は本草学と栽培学から始まり、そのテキストは明清代に中国で書かれた「本草綱目」「二如亭群芳譜」だったが、そこに植物画は少ない。ヨーロッパではルネッサンスの始まりとともに植物誌が編まれるようになり、1530年にはブルンフェルス「本草植物図譜」Herbarum Vivae Eiconesが、1542年にはフックス「植物誌」De Historia Stipiumが、精巧な植物木版画を伴って著される。十六世紀後半からは金属版印刷による植物誌が現れ、園芸もまた隆盛を極めていく。リンネは1735年に「自然の体系」を著し、当時活躍した植物画家ゲオルク・ディオニソス・エイレットは有名な植物の性体系の図を描いた。フランス革命で王座についたナポレオンの妻、ジョゼフィーヌは近代的なバラ育種を支援し、その成果をピエール・ジョゼフ・ルドゥテに描かせ、植物画集の最高傑作と呼ばれる「バラ図譜」Les Roses (1817-1824) が生まれた。

### 本草綱目

<李時珍(1518-1593) / 1596年刊行全52冊>

明代本草書(薬草解説書)の決定版で、わが国においても幕末まで本草学の基本文献として尊重された。文字による記述が専らで、少ない稚拙な図は李時珍の子息が作成したと言われる。



草部目録第17巻目次



右上から順にアサガオ(黒実)、アサガオ(白実)、ヒルガオ、ノウゼンカズラ、ノイバラ、コウシンバラ、トウカラスウリ、カラスウリの図

### Les Roses (バラ図譜)

<Pierre-Joseph Redoute (1759-1840) / 1817~24年刊行全4冊>

ナポレオン皇后ジョゼフィーヌはマルメゾンに内外から300種近くのバラを集め、たくさんの品種の育成を支援した。本書はその集大成で植物画集の最高峰と呼ばれる。



*Rosa indica vulgaris*  
パーンズ・ピンク・チャイナ  
中国から18世紀後半に英国に渡り四季咲き形質の導入に貢献したバラ



*Rosa gallica officinalis*  
フレンチ・ローズ、プロヴァンのバラ



*Rosa xcentifolia*  
キャベジ・ローズ

## 第三章 江戸の植物画と園芸書・本草書 初期

江戸時代の徳川秀忠・家光の時代には將軍本人に「花癖」があり、世間でもツバキが流行したようである。1630年には安楽庵策伝が自家百品種のツバキについて説明した「百椿集」を編んだ。宮内庁に所蔵される「椿花図譜」は著者成立年未詳ながら1673年以降の作と考えられており、618もの品種が丁寧に彩色鮮やかに描かれている。1681年には花卉184品種の性状と栽培法を説明した「花壇綱目」が編まれ、本邦初の園芸書とされる。1692年には江戸近郊染井の植木屋・伊藤伊兵衛三之丞がツツジ・サツキ334品種について解説した「錦繡枕」、同じく1695年に花卉394品種を解説した「花壇地錦抄」、1692年には黒田藩藩医・貝原益軒が花卉197品種を引用と体験をもとに解説した「花譜」が刊行され、ここから園芸書が続々刊行されていく。この頃、簡略な挿絵はあっても美しい絵図を備えた園芸書はまだ見られない。

### 椿花図譜

<著者成立年未詳・原版宮内庁書陵部所蔵 / 1969年復刻刊行>

江戸時代の元禄期前後に作成されたとされるが、作者不明の図集。本書は、古来よりその存在が噂されていたが、実際に確認されたのは昭和に入ってからである。本書に記載されている椿は618品種にのぼり、その花が色彩鮮やかに描かれている。説明文はない。



上はこく毛具。下は妙蓮寺と書かれているが、現今の妙蓮寺とは異なる品種である。



上は南京と呼ばれる品種で、八重咲の大輪花が特徴。下は山茶花椿。



上は天下(あまがした)、斑入りの花卉が際立つ。下は紅白のコントラストが美しい本因坊。

### 花壇綱目

<水野元勝(未詳) / 1681年刊行全3巻>

本書は、江戸初期の植栽技術を総合的に解説したわが国で最初の花弁園芸技術書である。180種以上の花卉について、性状と栽培法が簡述されている。図は少ない。



本書の表紙



春風に香る梅の様子を描いている。

## 錦繡枕

〈伊藤伊兵衛三之丞（?-1719）／1692年刊行全5冊〉

ツツジ類の栽培に精通した伊藤伊兵衛三之丞による本書は、334品種のツツジやサツキが描かれ、花の形態や栽培法についても丁寧に解説されている。



赤い花弁が特徴的なツツジの霧島



細長い花弁が特徴的なツツジの花車



葉も花弁も線状化したツツジの青海波

## 第四章 江戸の植物画と園芸書 —画とテキストが融合した画集—

1699年には、伊藤伊兵衛政武が父・三之丞の遺した草花119種の精細な写生線図を編んだ「草花絵前集」を刊行した。また、政武が収集したカエデ36品種の葉を彩色で描き、品種名の由来した古歌等を説明した「古歌僊楓集」を1710年に作り、後に刊行した「増補地錦抄」（1719）に収録した。この時代にたくさん刊行された美しい植物画を伴う園芸書の代表として、絵描きの模写用手本「絵本野山草」、斑入り植物画集の「草木錦葉集」、マツバラン珍品を集めた「松葉蘭譜」、菖翁・松平定朝のハナショウブ園芸書「花菖培養録草稿」、アサガオ変わり咲きを蒐集した「三都一朝」を展示する。

### 古歌僊楓集

〈伊藤伊兵衛政武（1676-1757）／1710年刊行〉

伊藤伊兵衛政武による本書は、カエデ36品種の葉を原寸大で彩色し、品種名、特徴、そして名の由来となった和歌が記された楓図譜となっている。



右:手向山(和歌は菅原道真)  
左:名月(和歌は中務卿具平親王)



赤地錦(和歌は院御製)



小倉山(和歌は藤原定家卿)

### 絵本野山草

〈橋保国（1715-1792）／1755年刊行全5冊〉

江戸時代中期の大坂で活躍した狩野派絵師の橋保国が記した植物図譜である。草木は線画によって描かれ、植物の特徴を的確にかつ色彩豊かに表現している。



宝相花(ぼたんばら)  
牡丹様の花色が特徴  
(四巻)



シャクヤク(二巻)



オモトは家康公ゆかりの永島(永縞布引). 左下はオオヤマレンゲ(二巻)



斑入りのカキツバタとガマ(三巻)



バラやイチョウなどの斑入りが描かれている(一巻)

### 草木錦葉集

〈水野忠暁（1767-1834）／1829年刊行全7冊〉

斑入り植物のみを取り上げた本書は、世界的にも珍しい一冊とされる。著者のコレクションは絵師が描き、その特徴や特性、栽培方法が解説されている。

### 松葉蘭譜

〈長生舎主人（1794-1870）／1836年刊行〉

本書は、江戸中期に流行し、後期には多数の変異が作出されて高値で取引されたとされるマツバランの専門書である。60品種の彩色図と122品種についての解説をおさめる。



富士雪は古い品種で、細軸で形は素直であり、とても白い斑が入る。

### 花菖培養録草稿

〈松平定朝（1773-1856）／1853年刊行〉

本書は二十一葉の花の図、一葉の草表裏図、歌二首、栽培法が収められている。著者は菖翁とよばれ、花菖蒲の花形を飛躍的に発展させた。



江戸系花菖蒲の中では最も歴史的な銘花の一つである宇宙（おおぞら）



太軸で無地であり、枝先が枝垂れ柳のように垂れる鳳凰柳



細軸無地の枝が高く伸び、あちこちで石化し、枝先に折り鶴が出る折鶴



仙女の洞は、花卉の輪郭の描く曲線が何とも粹な花で菖翁が親愛する「狂い」の姿



明治神宮で現在も保存されている虎嘯（こしょう）

### 三都一朝

〈成田屋留次郎（1811-1891）／1854年刊行全3冊〉

入谷の朝顔師・成田屋留次郎がまとめたアサガオの図譜。彩色図88点を収め、京・大坂の花も含む。掲載花には、牡丹咲き、獅子咲き、車咲き、風鈴咲きなど様々な形態と多様な色合い・模様の変化朝顔が紹介されている。



著者が育成した柿色刷毛目絞り車牡丹咲きのアサガオ(上巻)



右は斑入り南天葉、左は斑入り八手葉の牡丹咲きアサガオ(中巻)



柿色と紫色の花弁をもつ咲き分けアサガオ(上巻)

幕末日本の植物を欧州に紹介した外国人博物学者として、ケンペル、ツェンベリ、シーボルトの3人があげられる。松戸分館ではそれらの書を所蔵しているが、ここではツェンベリを代表として「Thunberg's drawing of Japanese plants」を展示する。また、尾張の伊藤圭介は長崎にシーボルトを訪れ、ツェンベリのFlora Japonicaを譲り受け、それを和訳し「泰西本草名疏」（1829）として刊行した。ツェンベリはリンネの高弟だから、本書は西欧の近代植物学がわが国への最初の体系だった紹介となった。また、本草学では、「本草綱目」をもとに貝原益軒が「大和本草」をまとめたが、岩崎灌園はそれをバージョンアップし、自ら描いた多数の写生図を伴う図鑑「本草図譜」を1828年に完成し、1830年から始めて、死後引き継がれ、1844年に全96冊刊行された。

泰西本草名疏

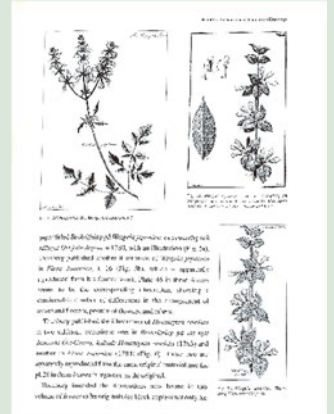
<伊藤圭介(1803-1901) / 1829年刊行>

伊藤は、名古屋の本草学から蘭学に発展した研究会・嘗百社のメンバーで、長崎でシーボルトから植物学を学び、ツェンベリのFlora Japonicaを受け取った。これを翻訳して出版し、近代植物学がわが国への導入に貢献。のちに帝国大学教授。

C.P. Thunberg's drawings of Japanese plants : Icones Plantarum Japonicarum Thunbergii

<Carl Peter Thunberg (1743-1866); edited by Y. Kimura and V.P. Leonov / 1994年刊行>

ツェンベリはスウェーデンの博物学者で、リンネの弟子。出島商館付医師として鎖国期の日本に1年滞在し、帰国後、初めて「Flora Japonica (日本植物誌)」をまとめた。本書はツェンベリが遺した植物画をまとめたもの。



論文(上右)や日本植物誌(下右)に描かれたニシキウツギの図。下記のニシキウツギの図が改変されている。



リンネ24網図



ツェンベリの肖像画



Weigela japonica (左;ニシキウツギ)とWeigela coraeensis (右;ハコネウツギ)

本草図譜

<岩崎灌園(1786-1842) / 1830~44年刊行全96冊>

岩崎は、江戸の本草学者。植物の栽培に長け、描画の才にも恵まれていたことから、二千以上の正確な色刷図版を備えた初めての本草学の図譜を完成させた。



ノイバラ



コウシンバラ



大根

# 第六章 明治大正の植物画と園芸の隆興

明治期に入ると、最初、多くの欧米の園芸書が和訳刊行されるが、1887年には「植物学雑誌」が、1889年には「日本園芸會雑誌」が発刊し、わが国における近代植物学・園芸学が始まる。この時代に大活躍したのが、園芸学校草創時に植物学講師として教鞭をとっていた牧野富太郎である。この時代は写真がまだ普及しておらず、植物学・園芸学の記述には写生図を必要とした。牧野先生は持ち前の画才と文才を大いに発揮して、これらの学術誌に多くの記事を掲載するとともに、1916年には自ら中心となって「植物研究雑誌」を発刊した。民間では、明治時代、植物は重要な輸出品となり、そのための美しい植物図譜が刊行された。

## 彩色寫生輸出百合花集

<池田次郎吉(1863-?) / 1895年刊行>

池田は、津田仙が興した学農社の社員、のち早稲田農園代表。学農社は近代農業と西洋種苗の普及を目的とした結社。ユリ根は明治期わが国最大の輸出植物商品だった。



ササユリ

## 植物学雑誌

<日本植物学会 / 1887年発刊>

矢田部良吉ら当時の東京大学植物学教室のメンバーが中心となって第1号を発刊。牧野富太郎は、論説筆頭に「日本産ひるむしろ属」を執筆。第3巻では、大久保三郎と共著でわが国初めて英文新種記載論文を掲載。



テッポウユリと黄ヒメユリ



赤カノコユリとクロユリ



ヤッコソウ 牧野が25巻299号に新種記載のために描いた図

## 日本園芸會雑誌

<日本園芸會 / 1889年発刊>

日本園芸會は、大蔵省の役人だった吉田進が中心となり、幕府からパリ万博に行った田中芳男や内務省博物局の田代安定らとともに、西洋の近代園芸を導入・普及することを目的として1889年に設立した団体。

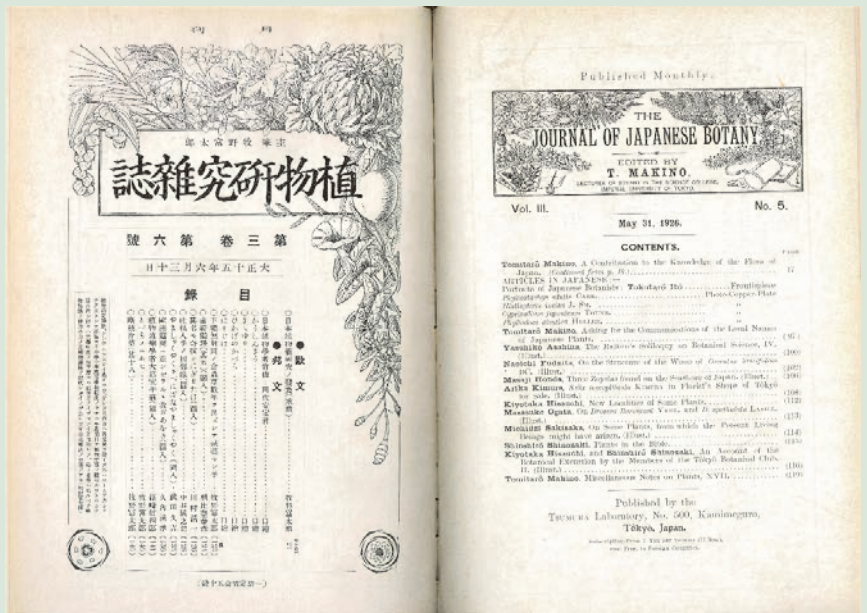
## 植物研究雑誌

<牧野富太郎(1862-1957) / 1916年発刊>

牧野が自ら主筆・編集者兼発行者となって発行した雑誌。各号の扉・裏扉にはキク、ツツジ、サクラ、桐乱や標本を伴った華麗な植物裝飾画が掲げられ、牧野の画才と植物に対する情熱を示す。



ノジグク 牧野が発見・命名し第23号に掲載した図



第3巻第5号の裏扉(右)と第3巻第6号の扉(左)の植物裝飾画

## 第七章 園芸学校における植物画教育

愛媛出身の田中寅三先生は明治美術学校・東京美術学校在学時から黒田清輝率いる白馬会に出展、卒業後は和歌山県立田辺中学校、東京帝国大学理学部植物学教室で勤務後、1914年に千葉県立高等園芸学校に赴任され、1942年まで勤務された。この間、図画の教育を担当し、多くの学生を教えるとともに、「園芸学校講堂」をはじめとする本校キャンパスに材をとった多くの絵を描かれた。本展示会では、ツツジ・サクラ・ボタン等の植物水彩画と指導した学生が描いた植物画を展示する。

### 田中寅三先生年譜

- 1878(明治11)年 田中文字二、政の次男として愛媛県宇和島に生まれる。
- 1885(明治18)年 一家は大阪に転居。
- 1894(明治27)年 山内愚僊に洋画を学ぶ。終生親交を結んだ赤松麟作と出会う。
- 1895(明治28)年 明治美術学校に入る。
- 1896(明治29)年 明治美術学校絵画科普通科を修了。同年、開設された東京美術学校西洋画科に入学。
- 1898(明治31)年 白馬会展に出品を始める(~1910)
- 1899(明治32)年 東京美術学校西洋画撰科を卒業、研究科に入学。
- 1901(明治34)年 和歌山県立田辺中学校に赴任、図画教育を担当。
- 1903(明治36)年 第5回内国勲業博覧会に出品。
- 1906(明治39)年 田辺中学校を依願退職。
- 1908(明治41)年 東京帝国大学理学部植物学教室に雇員として着任。
- 1913(大正2)年 仲間達とともに五更会を組織。同洋画展覧会を開催し、出品。
- 1914(大正3)年 東京帝国大学理学部植物学教室を依願退職。千葉県立高等園芸学校の助教諭として赴任、図画の科目を担当。
- 1917(大正6)年 公立学校職員制制定により、助教授となる。
- 1925(大正14)年 松戸高等女学校(現千葉県立松戸高等女学校)教師兼任、1930年まで。
- 1929(昭和4)年 千葉高等園芸学校助教授を依願退職、同校講師を嘱託される。
- 1938(昭和13)年 「海と船」洋画展の開催(~1942)
- 1939(昭和14)年 海洋美術展覧会に出品を始める(~1944)
- 1942(昭和17)年 千葉高等園芸学校を依願退職。
- 1945(昭和20)年 個展開催、以後毎年。
- 1961(昭和36)年 死去。享年83歳。



### 卒業生の回想

「1937(昭和12)年卒業の加勢俊雄氏によれば、1935(昭和10)年前後には図画の教室は講堂から古い寮の一室に移り、天井に窓を開けて明りをとった。1年では全員が履修し、4Bの鉛筆デッサンや水彩を描いた。また3年になると造園を専攻した生徒のみが履修し、石膏像や生徒のひとりをモデルとした木炭デッサン、水彩、模写等をさせたという。あまり説明はせず、自由に描かせ、そこに手を加えた。ワットマンの大きな紙が買って来てあって、模写はヨーロッパの名画を水彩で写させた。手元にあったたくさんの画集や図版の中から自由に選ばせてから、それは模写してもしかたがないから、こっちにきなさいというように指導したという。齒に衣を着せずに平気で辛口の批評もされたが、悪気はないので生徒は皆慕っていた。熱心で、丁寧な指導を受けた。」

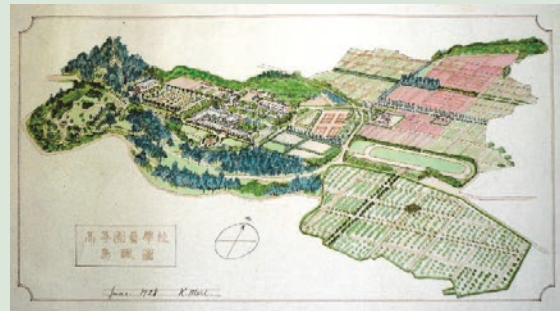
(田中典子「田中寅三の生涯と作品」、松戸市教育委員会『田中寅三 松戸に根を下ろした白馬会の画家』1995、より引用)

## 学生達が描いた園芸学校の佇まい



田中先生や学生がたくさんの植物を描いた園芸学校キャンパスは花と植物で溢れていた。左上は、現在のB棟の位置にあったツツジ園と温室。中上は現在の実験圃場にあった花卉園とローズ・アーバー。右上は現在のE棟の位置にあったボタン園と来客。

左下は、田中寅三が描いた園芸学校講堂（1920年代か）、現在のA棟の位置にあった。中下は、湯浅四郎が描いた園芸学校キャンパスの平面図（1915年頃）。右下は、森歎之助が描いた園芸学校キャンパスの鳥瞰図（1928年）。



## 園芸植物データベース・花色素ライブラリー

植物分子科学は、植物に含まれる様々な物質の分析や、それらの合成や蓄積にかかわる遺伝子・タンパク質の機能を、分子レベルで明らかにしようとする研究分野である。

自ら動くことのできない植物は、動物とは異なる独自の環境適応能力を発達させている。また、植物にしかなることのできない特有の物質（ファイトケミカル）を生み出すことで、病虫害や過酷な自然環境から身を守っていることが知られている。園芸学部では、身の回りの植物や多様な園芸品種を対象とし、それらが持つ特徴的な物質やはたらきを明らかにするとともに、得られた知見やノウハウを利用することで、新しい高機能性植物の開発を目指した研究を進めている。今回のアカデミック・リンク松戸のオープンに合わせ、花が持つ多様な色素のデータベースである「花色素ライブラリー」を作成・公開した。現在、園芸学部で精力的に研究を進めているグリアとデルフィニウムを中心に、代表的な品種が持つ色素と、その合成に関わる酵素・遺伝子の情報をインターネット上で自由に閲覧することができる。

花の色（写真）や品種名からその花が持つ色素の種類を検索したり、色素リストからその色素を持つ品種や生合成経路を表示することが可能となっている。植物科学を学ぶ学生や研究者のみならず、園芸業界に携わられている皆様、さらに、園芸や花に興味を持たれるすべての方々にとって便利で有用なデータベースとなるよう、さらに整備と拡充を進めている。

今回の展示会では、会場の一角に操作用のパソコンを設置し、この「花色素ライブラリー」を自由に検索できるようにしている。また、以下のURLからの閲覧も可能である。

<https://www.cu-hort.com/plant/index.html>



花色素ライブラリートップページ



さまざまな色から花を検索できる



品種名からその花が持つ色素を検索できる